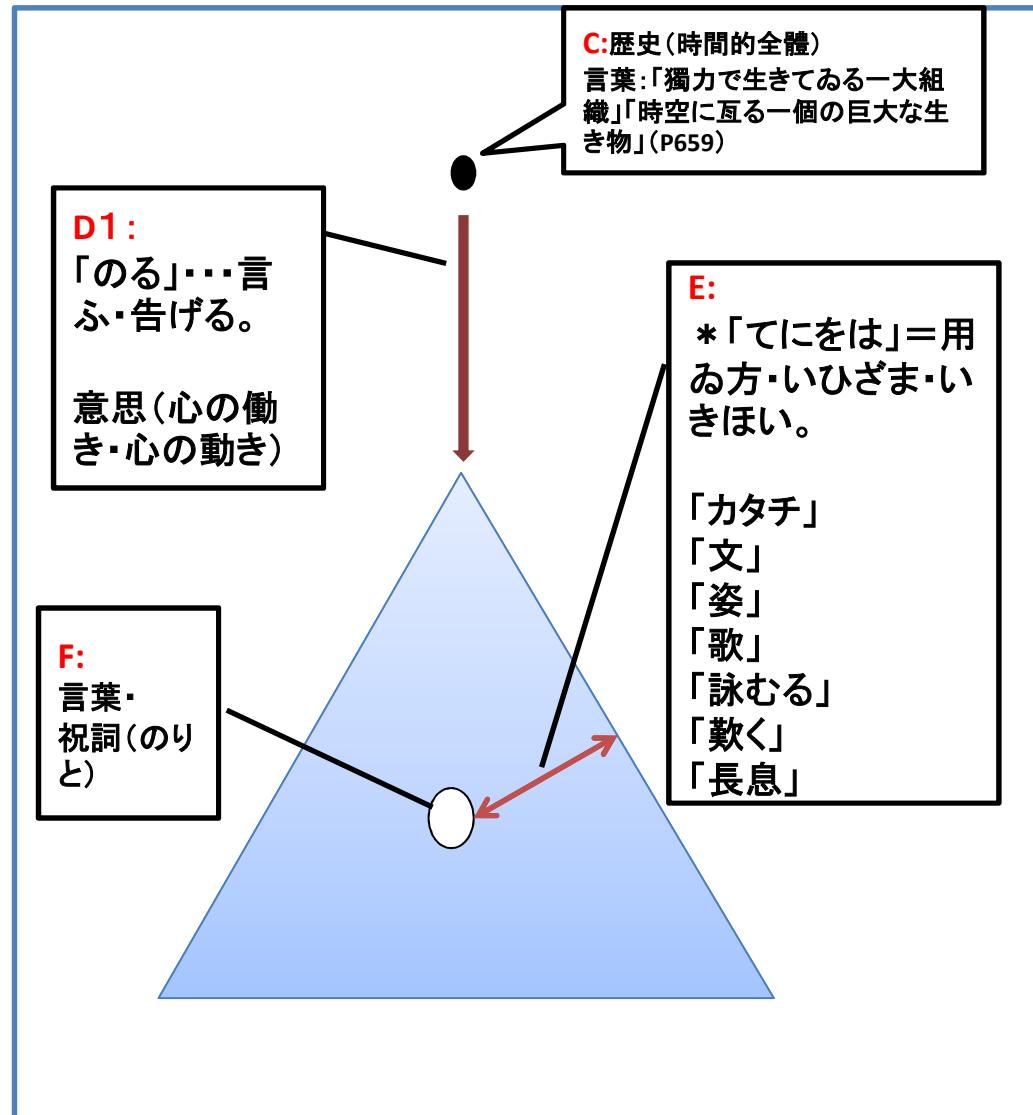


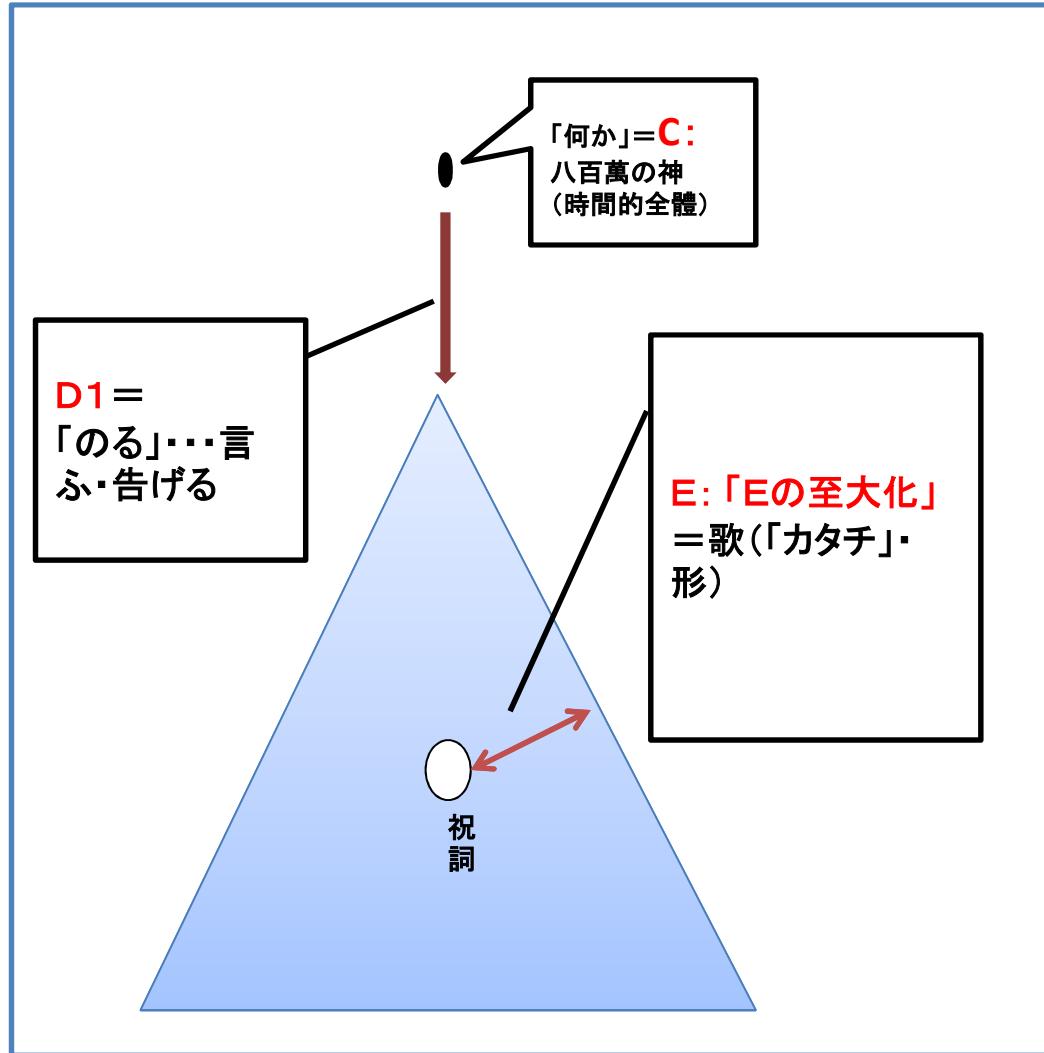
「世の遷り變る歴史は日常生活における心の動きそのものであつて、それは事(コト・シワザ)であると同時に意(ココロ)であり、すべてが言詞(コトバ)の中にあるといふ考へ方が何の疑ひも無く懷かれてゐた」



「言葉は意(意味も意思も)を傳へる事を目的としてはゐない。堪へ難い心の動搖を鎮め、整へ、吾が物と化する事によつて、それに耐え抜くといふ作用を第一義とするものである」(P665下)

- ~~~~~
- 「形のある『物』として見せる」役割として…
「てにをは」「文」「姿」「歌」「詠むる」「歎く」「長息」。
- 言葉の目的は、言葉によつて悲しみを「形のある『物』として見せ」、それによつて『心の動搖を鎮め、整へ、吾が物と化する』。さうする事で、「悲しみ」と言ふ場の沈湎から心を引き離して悲しみに耐え抜く事が可能となる。それが第一義的目的なのであると。恒存は「小林秀雄及び本居宣長」の文を引用し此の様に言つてゐるのである。その「心の動搖を鎮め、整へ、吾が物と化する」手立てとなる「カタチ(形)」として、「歌」が以下の様にその役目を果たすのだ、と。詰まる處「心の動搖(關係)を形のある『物』として見せるのが歌の力学」と言へるのではなからうか。
- 〔 P665下:小林秀雄文要略〕
悲しみ(心の動き・働き:D1)⇒シカタ⇒カタチ(形:E)⇒歌(言葉):E。
- 歌は、心の動搖を形のある『物』として見せ、それによつて悲しみ等を「鎮め、整へ、吾が物と化する」事を人に可能とさせる。そして心の動搖に耐え抜く力を與へてくれるのだ、と。

[P665下～6]: 言葉の目的は、言葉によって悲しみを「形のある『物』として見せ」、それによつて『心の動搖を鎮め、整へ、吾が物と化する』。さうする事で、「悲しみ」と言ふ場の沈湎から心を引き離して悲しみに耐え抜く事が可能となる。それが第一義的目的なのであると。その「心の動搖を鎮め、整へ、吾が物と化する」手立てとなる「カタチ(形)」として、「歌」が以下の様にその役目を果たすのだ、と。



[左圖の説明](P665下～6)

「『のる』は字義通りに解すれば、『言ふ』『告げる』であるが、それでは盡せぬ、何か(C)が、即ち、自他の心を動かし、或は鎮めようとする言葉の働きを信じてゐた古代人の語感がある」…とは左圖を參照。そして、恒存は此處で言ふ「何か」を當評論の見地(本居宣長論)から言つて、古代人の心を動かす「八百萬の神(時間的全體)」と見てゐるのではなからうか。